

文化財NEWS速報

ひぐらしの里の二天王立像は 平安仏だった!



伝毘沙門天像



伝持国天像

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録 (22) 0123 号

西日暮里三丁目の辺りは、「ひぐらしの里」とも呼ばれる寺町で、四季を通して多くの人々が訪れます。そのひぐらしの里で、平安時代にさかのぼる2体の仏像が確認されました。

仁王門の寺 その仏像は、諏訪台通りの中ほどに位置する養福寺に安置されています。養福寺は、高野山高台院の住職だった木食義高によって中興された寺です。談林派歴代の句碑(区指定有形文化財)がある江戸の文人所縁の寺として知られています。地元の方には、朱塗りの仁王門(同前)のあるお寺と言え、思い出される方も多いでしょう。仁王門の正面には金剛力士像(仁王像)が納められていますが、裏側にも2体の仏像、二天王立像が安置されています。今のところ仏像の種類を特定できていませんが、寺伝では向かって右が持国天、左が毘沙門天といわれています。

二天王像は一本造り この二天王像は、古仏を模倣して造った近世の仏像ではないかと考えられてきました。しかし昨年の夏、像の一部を破損したため、日本彫刻史の山本勉先生(清泉女子大教授)を招いて荒川区文化財保護審議会が調査を実施し、その結果、作り方や作風から平安時代後期、11〜12世紀の作であることが分かりました。後の時代に修理されていますが、頭部と胴体部を一本で彫り出し、背中に割れを防ぐための内刳りを施した、「一本造り」という平安時代の特徴的な技法で造られた仏像だということが明らかになりました。

京風と東国風 持国天像は針葉樹材製で比較的穏やかな洗練されたつくり。一方、毘沙門天像は広葉樹材製で力強くやや素朴な感じのする仏像だそうです。京都周辺で製作された持国天と、東国で製作された毘沙門天像とが、たまたま大きさが合うことから組み合わせられ、養福寺に安置された可能性も指摘されています。

江戸に迎えられた古像 養福寺の二天王立像は、昔から東京に伝わっている仏像彫刻の中でも古い例に属します。幕府が開かれ大都市へと変貌を遂げていく江戸に、どのように地方の古像が移動させられ、受容されていたのかを考えていく上で、大変貴重な仏像です。

両像は、2月に荒川区指定有形文化財となりました。今後、本格的な修理が計画されているようで、さらに多くの情報が得られることでしょう。

〔野尻かおる〕



伝毘沙門天像の背面

企画展「ほれ話⑦

煉瓦と火葬

— 火葬寺から火葬場へ —

はじめに 区内には、近世・近代の都市計画のために場所を変え、姿を変えた施設がある。浅草や下谷の寺院内にあった19カ寺の火屋（火葬施設）が、寛文年間（一六六一〜七三）に小塚原に移転してできたという、江戸の五三昧の一つに数えられた千住の火葬寺である。火葬には火が欠かせないから、密集地で行えば火災が起きかねない。明暦の大火の後、「災害に強いまちづくり」のため、日光道中と下谷通りに挟まれ、家が立て込んでいなかった小塚原が移転先に選ばれたのだ【野尻二〇三】。

火屋の構造 火葬寺内の火屋の構造については、「安政箇労働流行記」等から断片的な情報は得られるもののよく分かってはいない。明治初期、神道国家政策により一時火葬が禁止され、衛生、墓地不足解消の観点から再開されたが、その際の記録によれば、火屋の構造は近隣に配慮した構造に変更したようだ。厚壁塗りで、高さ1丈5尺（約4.5m）の煙出しを4ヶ所設け、家屋の総高は3丈2尺4寸（約9.7m）とし、煙を空气中に発散させて臭気を防ぐ工夫をしたという【東京都一九六五】。

明治10年（一八七七）、東京府病院の御雇外国人ブーケマによって千住火葬場の状況調査が実施された。報告では、想像していたより臭いは少ないとしている。さらにコレラ等の流行病を媒介するという噂を否定し、寧ろ病気の蔓延を予防する効果が期待できると評価した。ここに衛生上の効果を思えば近隣住民の多少の犠牲はやむを得ないが、視覚上、衛

生上の観点から建物の改造が求められるという条件が付された【東京都一九六五】。この報告は、火葬場の必要性を積極的に認め、不燃性の高い施設として近代化を促すことになる。

火葬場の煉瓦 明治20年4月の火葬場取締規則改定で、5カ所に制限していた数を8カ所に増加、その位置や構造上の規定が定められた。位置は、住宅密集地と人が集まる場所から120間（約216m）以上離れていること、周囲は塀や樹木等で囲うこと、火葬室は煉瓦で製造し、高さ60尺（約180m）の煙突を備えること。排泄物焼却所も煉瓦で高さ30尺（約90m）の煙突を付けること（火葬室用煙突と共用可）など6項目が定められた【東京都一九八一】。この規則改定が、東京に近代的な火葬施設を登場させることになる。周辺の市街地化が進んでいた千住火葬場は、先の規則改定により、しばらく営業を停止せざるを得なくなり、同26年、市区改正計画で指定された町屋に移転し、小規模ながら新たな施設を建設した【荒川区一九八九】。

『東京風俗志』の火葬場 東京の風習の変遷を調査した平出鏗二郎の『東京風俗志』（明治31年）に「博善会社火葬場」と題した挿絵がある（図）。祭壇の棺に向かつて読経をしており寺院のようにも見えるが、これは規制緩和により、同20年7月に開業した日暮里火葬場内部を描いたものである。同37年、町屋火葬場の隣に移転し、町屋日暮里火葬場と称されるようになった。挿絵では、左の人たちは奥の方に棺を運びようとしている。奥に接続する上部を見ると天井はどうも煉瓦のようだ。当時の日暮里火葬場の図面と照らし合わせてみると、平屋瓦葺きの葬儀所と奥の煉瓦造瓦葺きの火葬室に接する部分を描いていることが分かる【荒川区一九八九】。

明治の火葬場は、煉瓦を取り入れ、衛生や耐火性



図 『東京風俗志』下（館蔵）

を考慮した近代建築であった。しかし、そこに和風の意匠が取り入れられているのは何故なのだろう。大正時代、東京博善株式会社が、火葬場とは「寺院の延長である」と唱え、春秋彼岸施餓鬼会を執行している【東京博善一九七二】。とすれば、火葬場は経済的行為や遺体処理を行う場ではなく、故人を葬るための宗教的行為（葬礼）を行う場なのだとすることを表現するために、創り出した意匠なのかもしれない。【野尻かおる】

【参考文献】 東京都編『東京市史稿』市街篇第五七（東京都、一九六五年）、同前、第六〇（一九六九年）、同前、第七二（一九八一）、東京博善編『東京博善株式会社五十年史』（東京博善、一九七一年）、荒川区編『荒川区史』上（荒川区、一九八九年）、平出鏗二郎『東京風俗志』下（ちくま学芸文庫、二〇〇〇年）、野尻かおる「近世都市江戸における火葬場の成立と変容」（『江戸・東京近郊の史的空間』雄山閣、二〇〇三年）、火葬研究協議会立地部会編『火葬場の立地』（日本経済評論社、二〇〇四年）

⑥ 中区の土荒
「日暮里の台地から古墳時代の住居址」

西日暮里三丁目で二例目の住居跡。

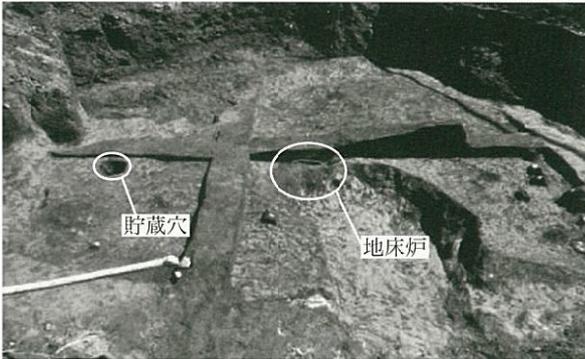
埋蔵文化財包蔵地内にある経王寺の敷地で、住宅建築予定があり、事前調査をしたところ、竪穴住居跡の一部が見つかりました《写真1》。詳細は平成23年度刊行予定の報告書をご覧いただくとして、概略をご紹介します。

平成22年9月半ばから本調査を始め、2週間ほどの期間で、弥生時代後期後半〜古墳時代前初頭にかけての竪穴住居1軒を検出しました。調査面積は、約42㎡です。

見つかった場所は、諏訪台と呼ばれる台地上（現西日暮里三丁目の一部）で、今回の調査地から西南約180mの台地斜面下にある、縄文時代の貝塚「日暮里延命院貝塚」がよく知られています。また、平成



《写真1》



《写真2》

22年に行った西日暮里3-3-11地点遺跡の調査では、7世紀後半の古墳時代にあたる竪穴住居跡が見つかっています（本誌23号参照）。今回の調査地から170mの諏訪台通りを北西に向かったところでは、

住居の時代は、遺物や住居の形、その構造の一部から、弥生時代後期後半から古墳時代前初頭と推定できます。

さて、この遺跡にはどんな人が住んでいたのでしょうか。残念ながら、調査地は、全体的に後世の攪乱を受けており、住居跡はかろうじて残っているといった状態で、住居跡の北側半分から南東にかけて削られ、西側もあまり残っていませんでした。そのため、遺物の数は少なく、破片ばかりでしたが、それでも若干のことは分かります。壺形土器の破片、台付甕の破片などが見つかっています。

住居跡の大きさは、推定4.5mで隅丸方形（角が丸い四角い形）をしていて、住居内中央からやや西寄りに地面を掘って作った炉（地床炉）、北西隅から南寄りの壁際に貯蔵穴が発見されました。地床炉は、炉の縁に土器の破片が埋没し発見されました《写真2》。

炉は、火を使って調理したり、暖を取るためにありました。貯蔵穴は、食料や水を備蓄しておく場所です。その他、建物の柱穴や住居を巡る溝などは今回の調査では見つかりません。ちなみに、この住居、床面に焼けた部分があり、住居内に炭化材が出土しています。火事の痕跡と考えられます。住んでいた人は留守だったのでしょうか。火元には今も昔も注意が必要です。

（八代和香子）

街角の
 しるし
 ⑤



今月はコレ！

何時だったかは覚えていないが、確か当館の講座によく参加してくださるSさんから教えてもらった。南千住五丁目の国道四号線と常磐線が交わる所。常磐線の高架には名前が付けられている。その名を「通り新町架道橋」という。汚れて読みづらいかもしれないが、プレートにはそう書いてある（別に「通り新町ガード」と書かれたプレートもある）。

「通り新町」というのは、この辺の古い地名だ。元禄八年（二六九五）に下谷通新町という町名が付けられて以来、三〇〇年ほど使われ続け、昭和3年（二九二八）頃まで南千住町の大字として用いられた。今日この名前を使っているのは、つぎり素盞雄神社の睦の一つ、「通新」しかないと思っていたが、誰でも見ることができる場所に、貼り付けられているという訳だ。

区内の鉄道のガード（架道橋）には企画展「煉瓦のある風景」で紹介された煉瓦が使用されていた三ノ輪ガード、諏方神社の東側の地蔵坂を降りきったところの諏訪坂ガードなど、それぞれ名前が付いている。そもそも、管理上の問題で付けられたのだろうか、設置された頃の地名がそのまま「保存」されているということになるだろう。現在の常磐線ができたのは、明治29年（二八九六）。周辺の地名が変わって、ガード名の意味が今ではもう分からないようになった場合も少なくないが、大切にしたいものだ。

（亀川泰照）

文学館通信 Vol.4

（吉村昭コレクションより）

【取材に旅した吉村昭】

現在、荒川区は「(仮称)吉村昭記念文学館」の設置に向けて、準備を進めています。

今年度は日暮里出身の作家・吉村昭氏に関連する展覧会が当区の企画展に引き続き、三重県鈴鹿市、東京都三鷹市、北海道札幌市で開催されました。ここでは、吉村昭コレクションから多くの資料が公開され、脚光を浴びました。

全国で愛される吉村昭 荒川ふるさと文化館の「平成22年度吉村昭記念企画展 作家・吉村昭の交遊録」(会期 平成22年6月12日～7月14日)では、同人誌や写真、「東京の下町」挿絵原画などの資料を展示し、文学を志す仲間や師とおおいだ文学者、編集者、挿絵画家との交遊について紹介しました。

鈴鹿市・大黒屋光太夫記念館の「開館5周年記念展 海のむこうへのがれ 漂流記と漂流文学」(会期 平成22年10月6日～11月28日)では、江戸時代の漂流記の紹介と、それを題材とした文学が紹



〔写真1〕三鷹・展覧会風景
左から2番目、夫人の津村節子氏

介されました。特に、井上靖「おろしや国酔夢譚」とともに紹介された吉村昭「大黒屋光太夫」は、鈴鹿市所蔵の草稿と並べて、吉村昭コレクションの直筆原稿「大黒屋光太夫」と画家・村上豊氏の挿絵額が展示されました。

三鷹市・三鷹市美術ギャラリーの「三鷹市市制施行60周年記念展 三鷹ゆかりの文学者たち」(会期 平成22年11月20日～12月19日)では、昭和40年代から現在まで三鷹に居を構え、作品の多くを生み出してきた吉村氏と夫人の津村節子氏が三鷹ゆかりの現代の文学者の一人として紹介されました(写真1)。吉村昭コレクションより、太宰治賞の賞状や受賞パーティー芳名録、直筆原稿「天狗争乱」、直筆メモ、同人誌などが展示されました。

札幌市・北海道立文学館の「特別展 吉村昭と北海道 歴史を旅する作家のまなざし」(会期 平成22年11月27日～平成23年2月6日)では、北海道への取材旅行を150回以上も重ねた吉村氏が残した、北海道を舞台とした吉村作品が丁寧に紹介されました。吉村昭コレクションより、テレビドラマ「破獄」の台本や直筆原稿「間宮林蔵」、直筆メモ、同人誌、愛用品などが展示されました。

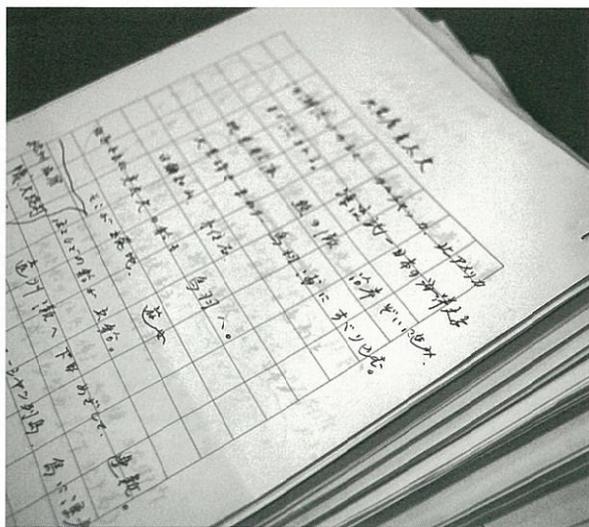
また、現在、吉村氏が取材で100回以上訪れた長崎では2つの展示を見ることが出来ます。

まず、県立長崎図書館では、「県立長崎図書館を訪れた文人たち 昭和期の芳名録を中心に」(会期 平成23年2月4日～4月10日)が開催中で、津村氏より寄贈された直筆原稿「ロシア皇太子と刺青」と『磯』のあとがき」が展示されています。さらに、3月11日にリニューアルオープンした三菱重工長崎造船所史料館の「戦艦武蔵」コーナーでは、吉村氏のベストセラー小説「戦艦武蔵」の直筆原稿(複製)や取材ノート(複製)などが展示されています。

このように、取材旅行を重ねた吉村氏の足跡を辿るような形で、各地の“ゆかりの地”で吉村氏に関連した展覧会が行われました。どの展覧会も大盛況で、日暮里出身の作家・吉村昭氏はこれからも多くの人がびとに愛され続けるでしょう。

吉村昭、小説を語る さて、吉村昭氏は、ゆかりの地に取材旅行の後、もう一度旅することがありました。吉村昭コレクションの中の原稿用紙に書かれた直筆メモにその片鱗を見ることが出来ます(写真2)。その多くは吉村氏が全国各地で行った講演・対談の準備メモです。原稿用紙は愛用していた、浅草にある「満寿屋」製のもので、作品執筆に使用するのみならず、講演内容をまとめる際のメモ用紙として使用していたのは興味深いことです。話術も兼ね備えた吉村氏にとって、執筆と講演は連動したものであったのかもしれない。

03-3802-3111(代)内線3353
教育委員会事務局社会教育課文学館調査担当



〔写真2〕直筆メモ

古い師吉田鶴翁 千住大橋の近くにある古い師が住んでいた。その名を吉田鶴翁という。元々、麻布谷町で先手組と力をしていたが、困窮の上、借財が嵩み、家督を譲って浪人になった。時に鶴翁40歳余。書道の先生や古いで生計を立てた。幸運に恵まれ、結婚して四人の子どもにも恵まれ、全国の陰陽師・古い師の宗本家にあたる土御門家の直門弟の地位を得て、吉田市正とも称し、対馬藩宗家にも出入りしたとか。かなり裕福で、膨大な蔵書を誇っていたというが、鶴翁の古い料は、金一円(一両)だった。それでも古いの仕事が続けられたということ。結構評判がよかったのかもしれない(「広瀬六左衛門」(『森銃三著作集』続編3)。「江戸寿那古細撰記」という「吉原細見」のパロディー本の中では、鶴翁は「易墨屋相助」(売卜者)という項目の中で紹介されている(『江戸明治流行細見記』)。もつとも、この本は、入銀といつて自ら出資して発刊されたものらしいのだが…)。

鶴翁と井戸 でもそんな邪推を跳ね返すくらい鶴翁の活躍は、実際にいくつか確認することができる。

安政7年(一八六〇)3月のこと。本郷御弓町に橋隆庵という旧家の屋敷の台所の前に井戸があった。名水と謳われていたが、一昨年来、井戸枠が壊れたままだったので、3月12日を吉日と選び、近所の桶屋に修復を依頼した。ところが、井戸から大風雲のごとく煙が吹き出し、中に入って仕事をしていく職人も吹き上げられてしまった。山が崩れるような激しい振動もあり、職人一同肝をつぶし、逃げ去ってしまう。そのままという訳にもいかず、手当てを増額するなど、職人たちを何とか説得し、再度工事に入るも、またもや同じ結果に。そこで隆庵は、鶴

今日のこの人③

古い師 吉田鶴翁

翁の元へ家来を遣わし、占ってもらうことにした。鶴翁曰く、井戸の内は神の住居である。よつて今後手出し無用。もし、手出しをしたならば、眼前で怪我、または人命を失う者も出るだろう、とのこと。帰った家来は隆庵にそう伝え、翌朝鶴翁に直に見てもらうことになった。鶴翁はいふ。神の住居であることはいよいよもつて間違いない。吹き上げられた土に金銀の粉が混ざっているのはその印である。庭の山の上にある先祖代々祀っている弁天二体のところに井戸があるが、その神がこちらの井戸に移動したのだと。その後、隆庵は、神道者にも相談したが、やはり同じことをいうので、井戸の周りに矢来を設け、参詣を禁じ、宇賀神と称して祀ることにしたらしい(『藤岡屋日記』9)。

さてこの時、鶴翁は事態を言語化するのみで、その後の対応については「無用」以外何も言及していない。詳細は不明だが、流れからいえば、対策を講じたのは鶴翁の後に呼ばれた神道者の方だろう。しかも鶴翁の後に神道者が呼び出されたのだから、案外隆庵は疑っていたのかも知れない。あるいは、古い師と神道者のすみわけができていた可能性もある。しかし、鶴翁が解決してくれる神道者を呼ぶという方向付けを行ったという解釈も可能ではある。

鶴翁と行方不明者 少し時代はさかのぼって、嘉永5年(一八五二)のこと。朝比奈甲斐守家の厩別当を務める清助が行方不明となった。実際には、千住生まれだという妻に先立たれ、高利貸などをしてお金に余裕のあった清助は吉原通いを始め、新吉原二丁目の勢喜長屋局見世で遊んでいたときに死んでしまっていた。だが、そんなことは、清助の縁者たちは知らない。八方手を尽くして探したものの、どうしても見つからない。そこで、鶴翁のもとを訪れ、

行方を占ってもらった。鶴翁がいうには、20里(約80km)先におり、命には別条がないとの由。近くとは全く考えず、遠くばかり探していたという彼らは、やがて浄閑寺にたどりつき、三日晒しの上、「取捨」の日に葬られた、腹(股?)に岡目の影物がある遺体がここに葬られたことを知る。新吉原で行き倒れたため浄閑寺に葬られたのであろう。この時代、行き倒れ人には、特定の道端に三日間晒され、縁者の名乗り出を待つという制度が存在した。「取捨」とは、土を掛ける程度ともいわれる、簡易な埋葬方法のこと。史料には、「取捨の日」、「取捨の跡にて」という文言があるので、「取捨」が他の遺体とまとめて葬られることを意味していたといえようか。ともあれ清助の縁者たちは、その後石塔を立てて供養している(『藤岡屋日記』5)。

鶴翁の占いは、大外れという他ないが、近くを探す、というヒントを縁者たちに与え、結果遺体の発見につながった。ここに紹介した鶴翁は、見えないものを言い当てることを期待され、実践しているといえよう。――当たろうが、当たらないが。

余談 話は代わるが、気になるのは、清助一件において、浄閑寺の者が確認したらしい、埋葬した人びとの身体的特徴まで記した帳簿である。こうした帳簿の存在は、埋葬後、何らかの形で死者を特定する必要が出てくることを前提にしているといえる。なんなら行き倒れ人の縁者が現れることを前提にしていたのかもしれない。ここまでくれば、もしやお思いの方もいるかもしれない。区指定有形文化財(古文書)になっている浄閑寺過去帳にはどう書かれているのかと。そこで該当年次部分を確認してみた。だが、清助の記載は見当たらなかった。ということでは、浄閑寺にはまた別の帳簿が存在したということなのだろう。

(亀川泰照)

文化館でお買い物

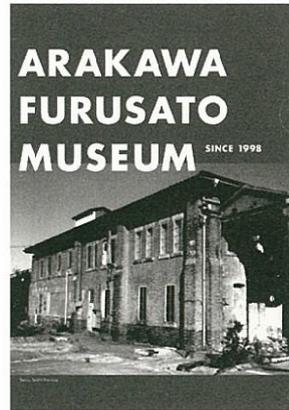
●復刻版「東京府北豊島郡尾久町全図」
¥2900

大正12年（一九二三）、尾久町が町制施行を記念して発行した、凡そ畳一枚分もある大型地図です。平成22年度第2回企画展「煉瓦のある風景」の開催を記念して、縮小版を復刻しました。

大正のはじめ頃まで農地もみられた尾久地域が、王子電気軌道（現在の都電荒川線）の開通や温泉地の開業などにより、急激に発展していた様子がうかがえます。煉瓦工場の一つ、山本煉瓦工場や、幻の野球場・東京ベースボール倶楽部運動場など、思わぬ発見があるかもしれません。ぜひお手にとってご覧ください。

●クリアファイル

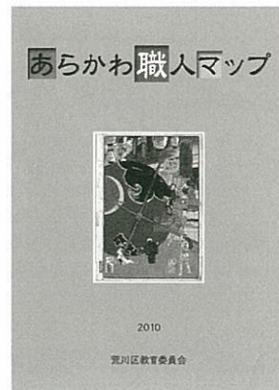
昭和59年に解体が開始された旧千住製紙株式会社（株）の煉瓦造り建築の工場（南千住六丁目）をデザインしたクリアファイルです。



¥220

●番外 あらかわ職人マップ

荒川区内の伝統工芸の職人と荒川マイスターを紹介したマップの最新版です。業種や連絡先の一覧も載っています。英語版もあり。無料。



¥0

※「文化館でお買い物」で紹介したミュージアムグッズ等は、当館展示室入口や区役所2階情報提供コーナーで販売・頒布しております。

文化館・文化財の動向

平成22年度上半期・下半期

4月1日 平成21年度の文化財を区報にて紹介。

4月24日～5月23日 平成21年度の文化財を「速報！あらかわの文化財」展にて紹介。

6月5日 区指定文化財「三河島山車人形・稲田姫」や「三河島山車人形・熊坂長範」を史跡めぐり「山車人形を見に行こう」にて見学。

7月31日～9月5日 企画展「発掘！あらかわの遺跡展」開催。区指定文化財「日暮里延命院員塚出土品一括」、区登録文化財「町屋四丁目実揚遺跡出土品一括」、「道灌山遺跡出土品一括」を展示。

10月8日～11月24日 無形文化財の職人さん、区内全24校で開催された学校職人教室にて実演。

10月9日～11月28日 これまでの区指定無形文化財の購入作品を「あらかわの伝統工芸品展」にて展示・紹介。

10月後半～11月前半 記録映像「伝統に生きる」（指定無形文化財、金切鉄・田中清介氏撮影）

11月10日 区指定無形文化財保持者の田中清介氏が東京都優秀技能者（東京マイスター）知事賞を受賞。

12月17日～19日 無形文化財の職人さん、「あらかわの伝統技術展」に多数出演。

1月20日 平成22年度文化財答申。

2月3日 平成22年度文化財告示（《指定》木造二天門付門番所及び築地堀、碩運寺文書、題目塔（元禄十一年二月中浣五日銘）七宝・島山弘）

2月5日～3月13日 企画展「煉瓦のある風景」開催。区登録文化財「千住製絨所絵馬」を展示・紹介（※通常は常設展で展示）。

3月19日～5月8日 区指定文化財「絹本着色献上鶴図」、足立区立郷土博物館企画展「千住の琳派——村越其栄・向栄の画業——」にて展示（※地震の影響で4/1～）。

■訃報

●荒川区指定無形文化財（木版画摺・昭和57年度指定）保持者の関岡功夫（扇令）氏（86歳・西日暮里）は去る平成22年11月6日に逝去されました。

●荒川区登録無形文化財（指物・平成13年度登録）保持者の木村年男氏（61歳・町屋）は去る平成23年1月12日に逝去されました。

謹んで、お二方のご冥福をお祈り申し上げます。